セッションⅤ

アジア共同体構想と宗教統一

——特に仏教について——

藤井真斎（フジイ・シンサイ）

一九二二年生まれ。
二松学舎大学卒業。現在、同朋学園仏教研究所所員。
専攻：近代文学。
〈主著〉
『わが故郷近江一』、『わが故郷近江二』（教育出版センター）共著、他論文多数。

一　唯物観と唯心観

世界のオーリヂンを物質的なものとし、精神、意識をその反映とする唯物論と、宇宙・世界のザ・トルー・フォームは精神であって、すべての物質はその現れであるとする唯心論の二つの考え方があるが、これらは物の根源を考えてゆく上で極めて重要である。つまり、物質を根源と考えるのが唯物論ないしは経済史観であり、人間の精神と考えるのが唯心論であるが、この二つの考え方はいずれも一方に偏したものである。すなわち、前者は人間の思想そのものがすべて物質的なもの――経済事情によって左右せられていると見る見方であり、後者は物質的なもの――経済事情そのものが、人間の精神の働きの結果であるから、本当の根本になるものは思想であると言い張るもので、いずれも物の一面しか見ていないのである。

歴史や社会のすべてが、物質――経済関係によってのみ動いてゆくものでもない。また、人間の精神――思想関係によってのみ動いてゆくものでもない。ある場合は、経済問題が重要な面を有するときもあろうし、一方思想によって歴史の大きな転機を見る場合もあるのであって、この両者の複雑な絡み合い――総合作用によって動いてゆくことを知らなければならない。従って、唯物論のみで政治を動かそうとすることは極めてセンスレスであることを知らなければならない。

二　現代社会と宗教

現代は激動の時代とも、未曽有の大激変期ともいわれている。すなわち、機械文明の発達は空間を狭くし、時間を短縮した。例えば、日本から米国へは一足飛びの距離に縮まり、時代の移り変わりは激しく、産業の近代化は終わって、脱産業の時代に入ったともいわれている。

佐野利勝氏は、「技術の進歩と像の消滅」の論文で、「われわれ現代人の内的外的生活から像は消失してしまっている。世界が像を失いはじめたのは、ヨーロッパではほぼ百五十年前からだといわれる。日本では七、八十年前からであろう」と述べ、その最大の原因として「われわれは技術の進歩に狂奔しながら大切なもの、とりも直さず像を打ち砕き続けている」と言い、技術の進歩を挙げている。さらに氏は「機械とともに生きる人間の精神状況はどんなものになるだろうか。像によって守られない人間は、心を失った孤独の人間であり、ただ力学的に動く人間である。そういう人間の集合は、愛なき世界であって、残忍性がはびこる」と述べ、機械文明の発達の中に生きる現代人の精神状況は孤独であり、自己疎外や断絶の時代であるというのである。これをそのまま放置するならば、非人間化は進み人類の破滅を促進することになろう。

これを防ぐためには、人間をその疎外から回復し、非人間化を是正し、本来の人間性を取り戻すことであろう。そして、この不確実の混迷の時代にあって、「生きる勇気」と「自信」を与えるものは宗教であり、それをなし得る者は仏教者であろう。

三　仏教と現代社会とのかかわり

コンフュージョンの時代に求められる「仏教」とは一体何か。普通いわれている通り、「仏教」とは「〝仏陀〟(buddha 覚者) の説いた教え」という意味である。そこから「仏陀になるための教え」という意味にも転化している。もともと、「仏教」はインドに現れた釈迦が、真理を悟って仏陀となり、その悟った真理を種々の教えに盛り込んで人々に伝えたのに始まるもので、釈迦の入滅後教えの整理、解説がなされて経・律・論の三種（三蔵）に分類編集されて、それを総称して「仏教」というに至ったものである。

この仏教には、大小二乗の別があって、小乗は三法印を宗として、大乗は実相印を体として発心修行して、初めて涅槃寂静の位に至るとするものである。では、三法印とは何か。それは

- 三法印
  - 諸行無常（一切は転変して止まらない）
  - 諸法無我（一切万物は原因・結果の一定の規則によって生滅する）
  - 涅槃寂静（煩悩を断滅して、生死の苦海を度越する）

である。実相印とは何か。それは

- 実相印
  - 実相の義理
  - 有空平等の大小乗不二の理
  - 実相の解喩

である。要するに釈迦の説く仏教は、人生には

愛別離苦（愛する人とも別れる苦しみ）

怨憎会苦（嫌な奴とも会わねばならぬ苦しみ）

求不得苦（欲しいものが得られない苦しみ）

五蘊盛苦（満ち足りて困る苦しみ）

があって、四苦八苦するが、それもすべて因縁である。これらから脱するには、「もろもろの悪を除き、つまり六波羅蜜を守り、善を実行して清らかに生きることだ」というのである。では、六波羅蜜とは何か。それは

①布施――無条件の施し

②持戒――堕落しないための十戒（不殺生戒・不偸盗戒等）

③忍辱――耐え忍ぶ

④精進――もののありがたさを知る

⑤禅定――心静かに自己を見つめる

⑥知恵――思いやりの心

である。

なお、禅語に「天地同根、万物一体」とあるように、釈迦は「われわれは阿弥陀仏によって生かされているのである」と説き、天地も万物もともに一心から生まれているのであり、すべて万物は相互相関の世界の中でその存在があるのだから、人間もお互い信頼を持って生活すべきだというのである。

今日、仏教の正しい在り方が求められているのも、社会や家庭の秩序が乱れ、自然は破壊され、新人類が生まれるといった騒々しい社会のためではなかろうか。

特に、機械文明の発達した今日、肉眼が開いておれば、確かに科学的なものの分別や記憶を助けるが、心の眼が開かれていなければ、草一本にも生命のあることも分からないで過ぎてしまうであろう。だから、こういう時代であるからこそ心眼を開いて物を見、自分というものが父母の奉仕により、社会の奉仕により、民族の奉仕により、人類の奉仕により、天地の奉仕により「生かされている」ことを知って、少しずつ奉仕を他にお返しするのが人間としての義務であろう。

一方、奈良時代の昔から文化の面において、中国、韓国等から受けた恩に対し、経済的に成長した日本は、そのお返しをするとともに、経済が遅れ、経済的、物質的に貧しいアジアの諸国に対しても、搾取や略奪でない援助や喜捨をすべきではなかろうか。

四　実存的空虚のある現代人と親鸞

「現代の人間」について述べる場合、だれしも「不安」「孤独」「疎外」について触れるが、一体これらの原因はどこにあるのだろうか。かのエーリッヒ・フロムは「提供されるおびただしい商品を、ただ消費してゆく心性――〝受動性〟のみが盛んで、能動的な世界とのかかわりの喪失が現代人の病的な心性特徴である。そのため、現代人は無力感、孤独感、不安感、倦怠に襲われる」といったような意味のことを述べている。確かに炊事、洗

濯は自動化され、おまけに外部からのボタン一つのリモウト・アベレイションで風呂炊きから家事一切が処理される時代となって、すべてはザ・パスィヴ・ヴォイスで、自ら行うアクティブは失われつつあるのが現状である。その上、それらによって生じた余暇は、テレビ、ラジオ、スポーツ、麻雀、競馬、競輪、酒によって消費し、倦怠を紛らわそうとして、かえって不安になり、心的調和のバランスが崩れ、思考と感情、精神と心事、事実と情念が分裂しているのが現代人の実状である。フロムは、もしこのような「合理的な思考と、感情の融合の二つの機能が分裂すれば、思考は精神分裂症的な知的活動（知性の肥大）に堕落し、感情は神経症的な生命に危害を及ぼす情念に堕落してしまう」と述べているが、まさに現代は戦後だれかが言った「総白痴」の時代であり、精神分裂症流行時代といえよう。

さらに、マス・コミの発達とコンピューターによる情報処理は、個人のプライバシーを次第に消失しつつあり、マンション生活、アパート生活への移行は、親子の断絶化と個人的な触れ合いの場の消失に拍車をかけて、個人の人間の深みは消え、シャロウでイーヴンでコントロールされる人間を生んでいるように思う。

V・E・フランクルは、現代人を次のようにディセクションしている。「人間は、内面の空虚さから逃げるため、スピードを出し自己を麻痺させる。生きる目標がなく、生活に内容のない、つまり実存的空虚のある現代人にとって、スピードはまさしく救いである」と述べている。時代の理想も目標も失われ、伝統も秩序も失われてゆく激動する時代に、スピードが蔓延するのは当然だというのである。目の当たり暴走族を見ていると、全くその通りだと首肯される。さらにフランクルは「現代には集合主義的思考が支配している。この集合は、単なる集団（マス）であって、共同体や社会とは違い、個人の人格性は圧殺され、人間は平均化されてゆくものである」と述べ

「自己を放棄し責任を取りたがらぬ現代人は、この集団へ落ち込んでゆく」とも言っている。左翼組合や、ある種の思想団体・マルクス主義国家にその兆候をうかがうことができるのではなかろうか。

以上見てきたような激動の時代にこそ、親鸞のような教えが必要ではなかろうか。彼はかの「平家に非ずんば人に非らず」と奢っていた平家が、源氏の前に滅亡するという激動期に、得度し出家した。そして、特に戦乱による生命の喪失・流離とその荒廃から生者必滅・会者定離の仏教的無常観を体験し、聖徳太子ゆかりの六角堂から、あらゆる悩める人々に身分の差別を越えて安心を与え救済する専修念仏の法然坊の元へ走った。現実の人間の世界（――末法五濁の世）と阿弥陀仏の誓願によって生まれた世界（名号不思議の世）、すなわち生死の苦海（――煩悩の濁水）と弘誓の智海（――名号不思議の海水、功徳の大宝海）の二つの海を考えて、下化衆生の道を歩んだ親鸞は、「私たちは生まれることの境遇について選択はできないが、しかし生まれた後は、人間として平等に生きてゆく権利はあるはずである。しかし、この世で生活できているのも、自分の力ではなく、すべて阿弥陀仏の慈悲により生かされている」のであるから「人はそれぞれ生かされている限り、あの世に往生するまでには、果たさねばならぬ使命がある」と言い、念仏して早く仏になって「大慈・大悲心を持て、おもふがごとく衆生を利益する」のが、浄土の慈悲だと述べている。私はフロムやフランクルが解剖して見せた現代人、つまり「不安」「孤独」「疎外」されている現代人にこそ、この親鸞の「人間の生き方」「人間の使命」を与えるべきだと思考するのである。

五　二者択一の風潮とアジアの共存

現代社会は二者択一の考え方が、手をかえ品をかえしてまかり通って、いろいろな争いを起こしている。同じ人間が、マルクス主義対自由主義、資本家対労働者、ブルジョア対プロレタリア、組合員対非組合員、雇用者対被雇用者、与党対野党等に分かれ、あくまでも自分の立場のみを是としてそれを固持し、相手側を敵として徹底的に叩くことのみを考えるならば、そこに断絶という深い溝をつくり、不信と疎外を招いてしまうであろう。

また、社会の木鐸たる新聞、雑誌等が、その公器性を通して自社の主張に合わないからとして、相手側を敵と断定し弾劾し斬り捨てるならば、相手側の不信感を増大させるだけであろう。

まして、平和を第一とする宗教が、カトリックやプロテスタントやイスラム教団に見られるような戦いを起こし、互いに血を流すといったことが、果たしてアジアの平和や人類の幸福に貢献することになるであろうか。

松濤弘道氏は「宗教の名の下に紛争を続けている人々をよく見ると、きまって一神教を信じていることに気付かされる」と言っているが、何故このように一神教のみがそのような争いを起こすのであろうか。これについても、氏は「神は、人間を超越した唯一絶対なもので、その創造者である自然は、人間と対立し服従さすべきものではあっても、それと調和し同化すべきものと考えられず、絶えず敵か味方かのどちらかにひき寄せられてきた。こうした二元論的二者択一の理論が一神教の特徴である」と述べている。このように一神教的世界では、すべての人々が好むと好まざるとにかかわらず敵か味方に二分され、互いに憎悪感を募らせているのである。しかし、

こうしたすべてのものを白か黒かまたは敵か見方に分けて、黒や敵のすべては悪であると頭から決めつける短絡的な考え方で、果たして人類の共存共栄が可能であろうか。やはり共存共栄を望むならば、宗教といわずイデオロギーといわずすべてにおいて、自分の側のみが絶対に正しいなどと考えず、「相手をも認めて許す寛容の気持ち」で、「より正しいもの」に向かって努力し話し合うところに、真の平和と人類の共存共栄が可能なのではなかろうか。

六　アジアの仏教伝来とその現状

一般には、仏教はインドで起こり、スリランカおよび東南アジアでは上座部系の部派仏教が入り、特に東南アジアでは大乗仏教（密教）が伝わったとされている。ベトナムには中国の大乗仏教が伝わり、チベットにはインドから密教が入り、さらにそれが蒙古方面へと広まったといわれている。中国へは、西暦後間もなく、中央アジアを通して仏教が伝わったが、その多くは大乗・小乗であり、その内の大乗仏教のみが栄えたと伝えている。

朝鮮半島へは、三七二年中国から高句麗に経典が送られ、三八四年にはインドの僧マラナンによって百済に仏教が伝えられ、新羅へは五世紀になって高句麗から伝えられたという。日本へは五三八年百済から仏像、経典が伝えられたというのが公の考え方である。今、これらを踏まえて、アジアの仏教の現状を少し見てみたい。

○インド

仏教のクレイドルの地インドでは、理論が高度すぎ、逆に民衆に溶け込もうとして堕落したことと、伝統的なカーストを否定したこととが重なって、かつてはガンジス河流域を中心に栄えた仏教は衰亡し、ビルマと国境を接している地帯とネパールとの国境地帯・ラダック地方にわずかに残るのみである。が、近年仏教の再興運動が各地に起こり、復興の兆しが見えてきた。

○スリランカ

インド大陸の南端にあるかつてのセイロン島は、仏教国で国民の大部分が仏教徒で占め、厳格な上座部の「教え」が確立され、これを精神上の支柱としている。宗派は、シャム宗、アマラプラ宗、ラーマンニャ宗の三派に分けられる。

○ビルマ

紀元前三世紀頃のアショーカ王の時代に、二長老が「梵網経」を携えて訪れたのが仏教の始まりといわれるビルマは、多民族国家であるが全人口の八五%は仏教徒である。民衆生活に仏教が密着しており、仏教に依拠して自己および家族、縁者の安心立命を願っている。特に一九六二年の軍事クーデターによって、社会主義国家になったが、精神的な基盤は仏教である。

○タイ

代々の国王の手厚い保護を受け、国民の九三%は仏教徒であり、国民皆僧ともいわれて東南アジア最大の仏教国となっている。教団は、マハーニカイ派とタマユット派である。

○ラオス

山国であるラオスは、タイと同様に歴代の国王の熱烈な支持を受け、国民の九〇%が仏教徒である。一九七五年に人民解放軍による革命が起きたが、仏教に対する弾圧はなく、むしろ仏教社会主義を目指していると見てよいだろう。

○カンボジア

一九七五年の「プノンペン解放」以降「クメール」と国名を改称したが、仏教についてはあまり詳しい情報は伝わってこない。ただ、かつてはこの国は仏教が盛んであり、国民の八五%が上座部仏教徒であったといわれている。しかし、革命の際に十万人の僧侶が還俗させられたといわれているから、現在は仏教が衰微しているものと推考される。けれども、近況はラオスの仏教社会主義を目指して、復興の傾向にあると伝えている。

○ベトナム

二世紀頃に中国から禅を中心とした大乗仏教が入り、七世紀から十世紀にかけて大いに栄えたといわれる。が、ヴェトナム戦争は、多くの寺院を消失し、加えて大統領の独裁政治による仏教弾圧は、仏教を苦境に追い詰めた

といわれる。最近の情報は、仏教に拠る平和を願う運動が広がりつつあると伝えている。

○ネパール

釈迦と関係の深いネパールは、ヒンドオ教を国教とする国であるが、他にイスラム教、ジャイナ教、その他シャーマニズム等がある。現在は、ヒンドオ教とラマ教が勢力を二分している。

○ブータン

ヒマラヤ山脈の南西の秘境に位置するブータンは、ラマ教徒が七五%を占め、仏教と政治の一致が見られる。

○チベット

中華人民共和国の統治下に入ったチベットは、一九五九年以降社会主義国となり、ために多くの仏教徒は国外に亡命し、留まるも対外的な宗教の布教活動は禁止され、多くの寺院は他の目的に転用されている。最近の情報では、個人の信仰は自由になったと伝えてはいるが、一度出された宗教撲滅運動は、今も中止されてはいないだろう。

○中国（中華人民共和国）

一九五八年の人民公社運動、さらに一九六六年の文化大革命によって、「宗教撲滅運動」が推進され、解放前

にあった仏寺四万と僧尼五十万人は壊滅状況になったといわれる。しかし、一九七八年に「宗教・信仰の自由」が確認されて仏教の復興が見えはじめてきた。が、宗教・信仰の布教する自由はなく、増えることはない。今の中国がマルクス・レーニン主義の唯物史観を捨てない限り、宗教も社会経済上の基礎の上に立つ上部構造だから、基礎が変革されれば、仏教は単なる残存分として、やがてはなくなるであろう。

最も新しい情報では、中国仏教は大乗仏教であり、すべてを社会主義国家に奉仕することを命ぜられているとのことである。

○台湾（中華民国）

昔から黄檗山系の禅と、儒教や道教と習合した媽祖とが信仰されていたが、第二次大戦後、中華民国となって以来、従来のものに斉教や居士仏教が加わり、中華民国仏教会が結成され盛んである。

○モンゴル・ソ連

十三世紀にチベットから仏教が入って以来ラマ教である。一九二一年の革命の折に、厳しく取り締まられたが、その後「信仰の自由」が認められて今日に至っている。ソ連は、その昔国教であったロシア正教が、革命の粛正にあったが、今日はラマ教が中心をなしている。

○韓国（大韓民国）

前述した従来の仏教は、第二次大戦後大韓民国となったのを機に、大韓仏教教団を結成して盛んとなった。現在、大韓仏教曹溪宗、太古宗、旧仏教、眞覚宗、元曉宗、法華宗、仏入宗等が活躍している。

○北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）

一九四八年に朝鮮民主主義人民共和国が生まれて以来、その内部事情は明らかではない。が、「信仰の自由」が保証されて以来、北朝鮮仏教総務院が組織されている。一九五〇年の悲しい韓国動乱で打撃を被った。今の国会である最高人民会議には、平壌の朝鮮仏教連盟がその代表を送り込んでいるとのことである。

○香港

戦前には大陸から伝わった仏教があったが、中国の宗教政策に不安を覚えた人々が、中華人民共和国から信教の自由を求めて香港に多く移住したために、仏教活動は盛んになっている。

○シンガポール

ライオンの島というサンスクリットのシンガプーラから地名ができたというシンガポールは、中国人、マレー人、インド人等からできている複合国家であり、従って宗教も複雑である。しかし、人口の七〇％を占める華僑の大乗仏教が多く、次にインドのヒンドゥー文化の影響もあってヒンドオ教、その他回教、道教、キリスト教が入りまじっている。

○マレーシア共和国

西紀七世紀から十三世紀にかけて、小乗仏教やヒンドオ教が流入したと考えられるが、その後華僑の移住とともに大乗仏教が流布したようである。現在は、イスラム教が国教となっている。

○フィリピン

一九四六年に独立したものの、スペイン領として長い間植民地政策をとられていた関係で、人口の八二％がカトリックで、東南アジア唯一のカトリック教団である。他にミンダナオ島を中心にイスラム教や、大陸から渡ってきた華僑の信仰する仏教がある。

○バングラデシュ

一九七一年にパキスタンから分離独立したが、国教としてイスラム教を信奉している。山地のチタゴン地方には仏教徒が住んでいる。

○インドネシア

古くから歴代の王の手厚い保護を受けて、仏教が流布していたらしく、各地に寺院遺跡が散在している。都市には華僑系が現世利益中心の仏教を信奉している。

○日本

欽明天皇のときに日本に仏教が渡来して以来、深く政治とかかわって文化にも大きな影響を与えた。特に日本仏教の特色は、渡来当初から歴代皇室の厚い保護を受けたことで、「鎮護国家」の標幟とともに、「護国仏教」として栄えたことである。さらに、仏教は日本固有の祖先崇拝の思想とも合致して、日本の風土にあった「日本仏教」化をなすとともに、他方現実的、実際的となり、国民生活に融合して国民の思想、文学、経済、産業、芸術等に大きな影響を与えたことである。

また、日本の国民生活に融合してゆく中で、真言、天台、浄土、浄土真宗、曹洞、臨済、日蓮等の各教団を成立させ、今日では、これらに創価学会、立正佼成会、霊友会などといった新興仏教も加わり盛んになってきた。

第二次大戦後は、経済的基盤の崩壊とともに一時は衰退したが、今日では教育はいうに及ばず出版界にまで進出し、国民の直接的な指導に乗り出しつつあり、ために仏教は国民の精神ならびに物質生活の中に消化され、日常生活の中に侵入して知らず知らず仏教生活に浸っている。

しかし、一方ルックマン博士の指摘しているように、「見えない宗教」となり、内部崩壊とともに、人心のデケイに拍車をかけているのが現状である。

以上のように、アジア各国における「仏教伝来とその現状」を概略見てきたのであるが、過去二千数百年前にインドから出てアジア各国にスプレッドしサーキュレイトされた仏教は、土着化し、それぞれの国民の生活と融合している国もあるが、イデオロギーによる宗教撲滅運動によって、排除され消滅の危機にさらされている国も

あり、新しい外来宗教にとって代わられて、仏教そのものが疑似宗教化し俗化している国もある。

しかし、いずれにしてもアジアの宗教は、仏教が一番多いということである。従って、こうした激動の末法期的時代環境にあっては、「古くて新しい」仏教を通じて、混迷するアジアに一つの指針を与え、自然と人間との調和を図り、イデオロギーや民族間の対立、コンテンションを越えて、アジア人類の幸せのために尽くすべきではなかろうか。そのためには新しい思想「統一原理」を基調とする新しい仏教理論によって、アジアの今後の活路を見いだすべきではなかろうか。

七　現代の宗教が持つべき要件

今日の世界は、文化が行き詰まり、新しい思想による新しい文化の創造が望まれている。李相憲氏は「人間は堕落した結果、本来の姿を失っています。しかし統一原理だけでなく、実存哲学も人間がその本性を失っていることを説き、また一般的にも、今日の科学技術文明において人間性が失われていると見られています」と述べられているが、まさにその通りである。われわれは、われわれの住む今のアジアの混迷の現状を、われわれの手によって打破しなければならない。そのためにはいろいろな手を講じなければならないだろう。

その場合、アジアの人々に問題を提起し、アジアの人々の理性に訴えるための支柱をなすものは思想であり、アジアの人々が求める永遠の安心、幸福を与えるものはリリジョン、つまりフェイスであろう。そのフェイスは、あくまで健康で、思想・行動が過激でなく中正で堅実でなければならない。では、そのための要件は一体何であ

ろうか。

かつて、明治の宗教家、境野黄洋氏は、「健全なる信仰の要件」という論文を発表して、次のような五つの要件を説明している。

第一はわれわれの信仰は知識的であるということである。

第二は感情を重んずることである。感情と知識の調和の上に健全な信仰は成立する。

第三は現世的でなければならぬということである。現世的というのは目の前の現世主義ではない。

第四は活動的であること。俗世界を超越したもので、現実の世界・社会で活動することである。

第五は倫理的であることである。活動が倫理的であることだ。

これは明治時代に発表されたものの要約であり、それだけに何か古めかしい時代遅れの宗教家の考えと思われるかも分からないが、よくよく吟味してみると、古いどころかむしろ今日の混迷のアジアに一つの新しい指針を与えるものだと思う。われわれは、流動する現実のアジアの社会をステァし、科学を踏まえた知識的な信仰に基づいて、アジアの人々ひいては世界の人類の悲願である「永遠の平和」を与えるようにしなければならない。

さらに現代の宗教が備えるべき大事なことは、今までの宗教が、ともすると精神主義第一で感情と欲望を罪悪視して物質面を軽蔑し、物質文明の価値を否定し無視したことである。やはり現実を無視せず、高尚な感情、欲望を養って、物質文明そのものの価値も認めるべきであろう。

また、とかく宗教は特殊なものとして、古めかしい古典的な袋に入れて理由なしにありがたがらせ、厳粛に敬虔すべきものとされるが、そうした従来の宗教から脱却して、だれにでも親しまれ、理解され、時には教義について自由に討論して内容を深め信仰されるものにしなければならない。

要するに宗教は、「死ぬため」のものではなく「生きるため」のものであるべきだろう。そのためにも、自分の信仰するものが正統で最高のものと考え、他を邪道として劣等視し異端視するというような硬直な考えを除去し、丁度コレステロールで流れの止まった血管を除いて新鮮な血を流すように、改革という刺激運動によって新しいアジアが生まれることを切望したい。

八　仏教とキリスト教

世界的宗教である仏教、キリスト教の類似点、相違点を明らかにし、その共通する類似点を通して、アジア共同体の統一思想を考える一つのリマインダァとしたい。

しかし、両宗教ともそのダクトリンはアビスに似て深遠で、インカパスィティの私には、その教義の深奥を知りそれをここに詳述することは到底不可能である。しかし、私は私なりに知悉し得た範囲で述べてみたいと思う。

今、次の表によって、両者の類似点、相違点を子細に見てみると、両開祖、釈迦、キリストを生んだ気候、風土、環境等の違いと、その体験内容の相違が、二人の得た究極的真理の違いと考えられる。けれども、仏教とキリスト教の間には、本質的に触れ合うものが認められるから、両者はお互いに手を携えて、共通の場を通して、分裂し混迷しているアジアを救う方法を考えるとともに、アジア共同体の実現と、その進歩と調和のために、ともに進んでゆくことが可能であると思う。

	仏教	キリスト教
類似点	・世界的宗教であり、開祖は究極的真理の体現者。 ・ミショネリを通じて全人類の救済をすること。	
相違点	神（仏） ・無神論（超越者） ・真理を悟った一人の人間 ・「仏性」は宇宙の万物に存在し、因果の法則によって支配される。従って人間も仏性を持つ。	・有神論 ・神は宇宙の創造主で、万物はその神に従属する。 ・全知全能の絶対者で、万物を支配する権利と力を持つ。 ・人間は神になり得ない。
	悟り ・悟りは万人に可能性がある。	・聖書に基づいて、イエスをキリストとずる者のみ神との正しい関係に入る。
	人間と動物等との関係 ・仏性は万物に存在するから、人間と自然は対等の位置にあり、お互いに存在価値を有し、両者は相依相関の関係にある。	・神は人間を神の姿に似せて造り、魂を入れた。 ・人間は動物等を支配する権利を神から与えられている。 ・動物等は神の意志により、人間に奉仕するように造られている。
	罪 ・万物一如の考えに背き、利己的になるから罪を犯す。	・神の意志に反するにことが罪。（原罪）
	救済 ・現実に目覚め、周囲との関連において自分をとらえ、人としての使命を考える。	・罪を神の前に悔い懺悔する。

九　今後の仏教求道者の生き方

仏教とキリスト教はアジアを大きく二分する宗教であると述べたが、そのアジアの仏教の中でも、その発祥地インドは衰微し、人口の最も多い中国が革命以後衰えている上に、韓半島が二分されているという悲しい状況を見たとき、日本の仏教がアジアの指導的役割の一端を果たすべき使命を負っているとみなければならないであろう。その意味で、日本の仏教徒、単なる形式的な仏教徒ではなく、真の求道者ならびに仏の道の実践者の、今後の生き方について卑見を述べてみたい。

かつての日本の宗教活動の母体は、光明皇后に見られるように教育や医療にまで及び、さらには文化の源泉ともなっていた。それが中世の戦乱と徳川幕府の政策によって、仏教は布教活動のみへと堕落していった。加えて第二次大戦後の日本は、宗教教育の禁止、土地改革、貨幣価値の低下等から、僧侶の経済的地盤の沈下と指導能力の喪失から営利を求め、文字通り葬式仏教と化してしまった。

しかし、その後国民の努力により、生活水準が上がり、平均寿命が延び、驚異の経済成長を見るにいたって、真の求道者・仏の道の実践家たちの間から改革が叫ばれ、その実行が試みられるようになってきた。このことは喜ばしいことだが、その説くところは、「家」「職場」という限られた狭い場が中心になるか、個人の内部を深めるということに限られている。

現代社会は、一個人、一職場だけで生活することができないばかりか、一国家、一民族ですら、他の国家や他

民族と孤立して生活することは、現在の貿易摩擦問題を見ても分かる通り不可能である。

こうした時代に生きるわれわれは、ここでもう一度親鸞の「上下関係を撥去した慈悲」と父母兄弟といった私的関係を越えて、生物はいうに及ばず、山川草木国土に至るまで遍満しようとした「四海同胞思想」を考え直し、指導実践の場を国際的にアジア全土に、さらには全宇宙に拡大して、宗教活動の母体を教育、芸術、医療等にも広げて、世界の人々すべてが身内と考える中で、個性や能力に応じて「世界平和」という理想郷に向かって生きるべきではなかろうか。

社会の変化に適応するより、むしろ変化から超越するのが仏教者であるという人もあるが、現代に生きるわれわれは、むしろ現代にどのようにかかわって生きるべきかを考えるべきではなかろうか。社会の変化に適応して、時代の要請に応えて、宗教的に意味づけられた——仏の道に叶う実践に身を挺することこそ、仏教徒の一つの責務ではなかろうか。

参考文献（順不同）

『統一理論研究　第二号』統一理論研究会
『宗教学辞典』東京大学出版部
『現代仏教を知る大辞典』金花舎
谷口光政『親鸞——その生涯——』サンケイ新聞生活技術センター

井関保『親鸞の生涯』桜楓社
『現代エスプリ　No七三』至文堂
『明治宗教文学一　明治文学全集』筑摩書房
清原貞雄『國史と日本精神の顕現』藤井書店
竹内清治『統一原理と仏教』光言社
松涛弘道『仏教的生き方のすすめ』中山書房
その他　親鸞　日本の思想三　仏教とキリスト教